

第三七回 光華講座

今ならブツダは何を語られるでしょうか？

財団法人東方研究会理事
東方学院院长

前田 専 學

皆様、ただ今過分のご紹介を頂きました東方学院の学院長をしております前田専學でございます。本日は、この伝統のある「光華講座」の講師としてお招き頂きまして皆様にお話しできますことを大変に光榮に存じております。このような機会をお与えいただきました一郷学長、荒牧所長、並びにご関係の先生方に厚く御礼申し上げますと共に本日はこのように大勢の皆様方のご参加をいただきまして厚く御礼申し上げます。

I スリランカの旅

さて、二ヶ月ほど前、八月十日から十八日までの九日間ほど、スリランカのある大学から招き

を受けてスリランカに行つて参りました。

スリランカは、ヒマラーヤ山脈を北辺とする逆三角形をした巨大なインド亜大陸の南東端の海上にぼつかりと浮かんだ西洋梨のような形の島国です。昔から紅茶で有名で、かつてスリランカはセイロンと呼ばれ、紅茶といえばセイロンティーというほどに有名でありました。一九四八年にイギリスから独立しました。正式名称は、スリランカ民主主義共和国であります。日本の北海道の約八割ほどの大きさの島国ですが、日本よりも古い歴史をもっています。私が訪問致しました主な都市の一つは、アヌラーダプラと申しますが、これはスリランカの北部にあります。アヌラーダプラは、今から約二五〇〇年以上も前にスリランカ最古の都があったところです。最初に首都になったのは紀元前三八〇年で、数度、首都が移されたことがありますが、すぐにアヌラーダプラに戻され、ほぼ千年間にわたつてスリランカの首都で、今は世界遺産になっています。

ここには、スリランカの仏教徒が約三十年ほど続いた「タミル・イーラム解放の虎」との抗争中、必死に守つたスリー・マハーボーディと呼ばれる菩提樹があります。スリランカには、菩提樹は沢山生えておりますが、この菩提樹は、並みの菩提樹ではありません。伝えられるところによると、ブツダは、インドのブツダガヤの菩提樹の下で悟りを開いたといわれていますが、このアヌラーダプラの菩提樹は、紀元前三世紀に、インドのアショーカ王の女王サンガミッタが、ブツダガヤの菩提樹の分け木をここに運び、当時の王デーワナーンピヤ・ティッサが植樹したものと伝えられております。この菩提樹の元木であるインドの菩提樹は、焼かれてなくなり、現

在のインドのブツダガヤの菩提樹は新たに植えられたものといわれています。この意味で、アヌラーダプラのこの菩提樹こそ世界で唯一の由緒正しい菩提樹であると尊重され、大切に保護され、特別の許可がない限り近づくことはできません。幸い、私達は許可されて、間近で、供物を供え、お参りをし、この手で触り、写真をとる事ができました。滅多にできない経験で、これだけでも来た甲斐があったと感動いたしました。

このアヌラーダプラから北東に十七キロメートル離れた所にミヒンタレー(Mihintale)という仏教史上見逃すことができない聖地があります。インドのアショーカ王が即位して十七年目に、各地に仏教の伝道者を各地に派遣しましたが、スリランカへは、自分の子供である三十二歳のマヒンダを派遣したのでした。これは紀元前二四七年の事であるといわれています。ミヒンタレーという地名は、このマヒンダに由来しているのです。

その時、アヌラーダプラの王デーワナーンピヤ・ティッサ(在位、前二四七―前二〇七)が、マヒンダに出会い、仏教に帰依したと伝えられています。日本に仏教が公伝したのは、それよりも九世紀も後のことです。インドでは仏教が十三世紀初頭に滅びました。今やスリランカは、菩提樹といい、このミヒンタレーといい、インドに代わって生きた仏教の一大聖地であることを実感いたしました。

その実感を更に強固にしたのは、キャンディの仏歯寺に詣でたときです。ここに祀られている仏歯は、紀元前六世紀に、インドでブツダの遺体が火葬に付された際に入手されたものといわれています。最初アヌラーダプラに奉納されましたが、その後、インドからの侵入者に追われて、

都がポロンナルワ、キャンデイへと移るにつれて、王権の象徴として一緒に移されたのでした。キャンデイでは、この仏歯を近くでお参りし、しかも大統領もかしづく仏教団の最高位のマハーナーヤカ長老に親しく拝謁し、記念に仏像を拝受致しました。

Ⅱ バーミヤンの仏像の破壊と巨大仏像の建造

以上述べた事は勿論私にとりましては、生涯忘れることができない経験であります。それら以上に感動したことがございました。それはスリランカのかつての首都コロンボ（現在の首都はスリ・ジャヤワルダナプラ・コーツテ）から車でアヌラーダプラへと向かう途中、クルネガラという名もない田舎町で、現在大きな岩山に建造中のこの国で最も高い仏像（約二十一メートル）を見る機会がありました。この建造は、二〇〇一年に、バーミヤンの仏像が破壊されたのがきっかけでした。そのニュースをきいたスリランカの人々の中には、イスラーム教のモスクを破壊しよう、という動きが起ったそうです。そのとき、このクルネガラのアラムウリ・アヌナーヤカ長老が、村人達に、そんなことをしないで、バーミヤンの仏像の代わりに、ここに大きな仏像を造ろうではないかと提案されたそうです。それを聞いた子供たちが、さっそく自分たちのお金を集めて、これで造って下さいと長老に頼んだところから、この壮大な建造が始まったということです。「さすがに仏教国スリランカ」と、感動をおぼえました。

Ⅲ ブッダの言葉

私は、この話をきき、実際に槌音高く巨大な石仏像が建造されつつあるのを見て、私は「ダンマパダ」(「真理のことば」)の詩句を思い起こしました。「ダンマパダ」という経典は、漢訳の『法句経』に相当します。「ダンマパダ」は、人間そのものに対する、まことに鋭い洞察と反省を端的に述べ、人生の指針となるような警句や金言に満ちております。そのために、南アジアの国々で尊ばれ、愛唱されているばかりではなく、数多くの西洋のことばに翻訳されて、西洋諸国にもよく知られるようになりました。また日本においてもしばしば邦訳されています。

まず、「ダンマパダ」は、つぎのような詩句ではじまります。

ものごとは心にもとつき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人につき従う。——車をひく牛の足跡に車輪がついて行くように。(一)

ものごとは心にもとつき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも清らかな心で話したり行ったりするならば、福樂はその人につき従う。——影がそのからだから離れないように。(二)

「かれは、われを罵った。かれは、われを害した。かれは、われにうち勝った。かれは、わ

れから強奪した。」という思いをい多く人には、怨みはついに止むことはない。(三)

「かれは、われを罵った。かれは、われを害した。かれは、われにうち勝った。かれは、われから強奪した。」という思いをいだかない人には、怨みはついに止む。(四)

実にこの世において、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの止むことがない。怨みを捨ててこそ止む。これは永遠の真理である。(五)

「われらは、ここにあつて死ぬはずのものである」と覚悟しよう。——このことをわりを他の人々は知っていない。しかし、このことわりを知る人々があれば、争いはしずまる。(六)

二五〇〇年前に活躍されたブツダが、二十一世紀に生きておられたとしたら、何を語られるでしょうか？ 私は、この同じ詩句を語られると思います。私は、二〇〇一年に、バーミヤンの仏像が破壊されたというニュースをきいたスリランカの人々の中に、イスラーム教のモスクを破壊しよう、という動きが起こったとき、このクルネガラのアマラモウリ・アヌナーヤカ長老が、村人達を、どのように言つて説得したか知りません。しかしおそらくはこの詩句を引用するか、さもなければ同じ趣旨の話をして、説得されたのではないかと思います。

今はもう遠い昔になつてしまい、もう憶えておられる方もほとんどおいでにならないかも知れませんが、第二次大戦後、太平洋戦争を名実ともに終結させる対日講和会議は一九五一(昭和二六)年九月四日からサンフランシスコで開かれ、当時の吉田茂首相が九月八日に四十八か国と講和条約を締結した時のことを思い起こします。

その時、出席していたスリランカのジュニアス・リチャード・ジャヤワルデネ初代大統領は、日本と日本国民に対する深い理解と慈悲心に基づく愛情を示され、この講和会議の演説に

実にこの世において、恨みに報いるに恨みを以てしたならば、ついに恨みの止むことがない。恨みを捨ててこそ止む。これは永遠の真理である。(五)。

を引用し、スリランカ(当時・セイロン)は賠償請求権はもっているけれども、それを放棄することを宣言されました。さらに「アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要である」と強調して一部の国々の主張した日本分割案に真向から反対して、これを退けられたのでした。

恨みに報いるに恨みをもってする戦争やテロは、今日もなお世界のあちこちで起こっています。近年の最大の事件は、今から八年前の九月十一日に、アメリカで発生した航空機による同時多発テロであります。未曾有の規模であり、アメリカは勿論、全世界に大きな衝撃を与えました。

この後何が起こったかは、皆さんよくご存じです。アメリカのブッシュ政権は、二〇〇二年に国際テロ組織とテロ支援国と断じた悪の枢軸(イラク、イラン、北朝鮮)との戦い、すなわち恨みに報いるに恨みをもってすることを国家戦略とし、「アメリカの防衛のためには、予防的な措置と時には先制攻撃が必要」として推進する方針を決めたのでした。これをもとに、アメリカ合

衆国はイラクに対して大量破壊兵器を隠し持っているという疑惑を理由に、イラク戦争に踏み切ったのでした。あの時、ブッシュ政権が、アメリカ国民が、偉大な英断をもって恨みを捨ててくれたならば、今日の事態は大きくかわっていたであろうと思われまます。

しかし流石アメリカです。同時多発テロ事件で三七〇〇人をこす犠牲者が出て、米政府によるアフガニスタン攻撃が開始され、報復を肯定する世論が吹き荒れる中で、翌年の二月、テロで肉親らを失った遺族たちが反戦を訴えるNGO「ピースフル・トゥモローズ」を結成。彼らは、アメリカ全土を旅して平和的解決を訴えるとともに、米軍の攻撃によって傷ついたアフガニスタンの犠牲者家族との交流も始めたのでした。ブッダは「怨みを捨ててこそ止む。これは永遠の真理である」と声を大にして叫んでおられるに違いありません。

このような国際的なレベルでの問題だけではなく、我々の日常生活においても、次元は低く、規模は小さいもののこのような葛藤が繰り返されています。

そのような場合にも、ブッダは、

「われらは、ここにあって死ぬはずのものである」と覚悟しよう。——このことわりを他の人々は知っていない。しかし、このことわりを知る人々があれば、争いはしずまる。(一六)と、説いています。

一休禪師の作品に、二つの骸骨の絵が描いてあって、その上に

「喧嘩しないでくらそうじゃないの　すえはたがいに　このすがた」

と、墨痕鮮やかに書かれています。同じ趣旨を説いているように思います。

IV ブッダの時代と生涯

さて、このように素晴らしい言葉を、真理の言葉を残されたブッダとはどのような人物であられたのでしょうか？

紀元前六〜四世紀ころ、ユーラシア大陸では、中国に仁を説く孔子(前五五二〜前四七九)、ギリシャに真の知恵を説くソクラテス(前四七〇〜前三九九)が登場し、そして同じころインドに慈悲を説くブッダ(前四六三〜前三八三)が登場し、民族や国境の枠をこえて受け入れられるような普遍性をもつ思想が唱えられ、人類は思想的・宗教的な黄金時代を迎えておりました。

ブッダは、紀元前五世紀に、現在のネパールの釈迦族(しやかぞ)の中心地であったカピラヴァットウ(サンスクリット語でカピラヴァストウ、カピラ城)の国王ストドーダナ(サンスクリット語でシュトドーダナ、淨飯王(じやうはんのう))の長男としてお生まれになりました。ブッダの母のマーヤー(摩耶夫人(まゐやふじん))が、出産のために実家に帰られる途中、カピラヴァットウの郊外にあるルンビニー園に立ち寄り、たまたま急に産気づいて、この園でブッダを生まれましたと伝えられています。

「ゴータマ」は、かれの姓で、(ブッダ)は、(仏陀(ぶつだ))は、「目覚める」を意味する動詞の過去分詞で、「目覚めた人」「さとった人」を意味する言葉です。これは固有名詞ではなく、仏教の理想的な修行完成者を示す普通名詞として用いられます。ブッダの名はシッタータ(悉達、サンスクリット語でシッタールタ)。日本では「お釈迦さま」とか「釈尊」という呼称が用いられますが、

これはシツダッタが釈迦族の出身であることに由来しています。

この釈迦族は、ヒマラーヤ山の麓の中部ネパールの南辺にあるタライ盆地に住み、父スッドーダナは、名義上は「王」と呼ばれていますが、実際は一種の共和政治を行っていました。釈迦族が住んでいた地方は湿気が多く、稲作に適し、釈迦族は、日本人と同じように、稲作に従事し、白米を尊重していたようです。

当時、釈迦族は、強大な王国であったコーサラ国（現在のウッタール・プラデーシュ州の北東部）に従属し、朝貢していたようです。しかしブツダの晩年または入滅後、釈迦族はこのコーサラ国のために滅ぼされてしまうことになります。

ブツダの人間形成の上でおそらく決定的な意味をもったと推測される事件は、ブツダが生まれて七日目に母親が亡くなったということです。かれの養育に当たったのは、母の妹であるマハー・パジャーパティ（サンスクリット語でマハーブラジャーパティ、大愛道）で、父王は妻の没後、その妹を後妻として迎えました。やがてこの後妻にナンダ（難陀）という男子が生まれました。

シツダッタは、王子として、物質的・経済的には大変に恵まれた境遇にありました。しかし実の母親がいない淋しさからでしょうか、繊細で、傷つきやすく、物思いに耽る傾向にあったと伝えられています。シツダッタは、青年時代に、人間の生・老・病・死について、深刻に考え、苦悩し、その原因を見出そうとしたのです。おそらく父王は、シツダッタのなにか物思いに耽り、悩み、苦しむ傾向を心配したのでしょう、十六歳になったとき、ヤシヨーダー妃と結婚させま

した。やがて二人の間に息子ラーフラ（羅喉羅）が生まれました。

しかしシツダッタの心はうつうつとして樂しまず、かれは深く人生の問題に悩んでいました。二九歳のとき妻子を捨てて出家し、苦行に専念しました。やがて苦行の無意味さをさとってそれを捨て、三十五歳のとき、ガンガー河の中流地域にあるブツダガヤーの菩提樹の下で深い瞑想のすえ、ついにさとりを開き（成道）、ブツダ（覚者）となりました。

このときのさとの内容が今日の仏教の源泉であります。それ以後、四十五年間、ブツダはガンガー河の中流地帯を歩き、伝道・布教に専念し、悩んでいる人々の救済に努められました。

ブツダは、二千五百年前の激動の時代に生まれ、神のような超人間的な存在の力に頼ることなく、超自然的な奇跡を行うこともなく、人間として、ただひたすら宇宙の理法（ダルマ）を追究し、それを人々に熱心に説き示し、八十歳の最後の最期まで、自らの向上に、真実の自己の実現に、宇宙の理法の体現に真剣に努力した人であったと私は想像しています。

V ブツダの教え

ゴータマ・ブツダの主要な関心事は人間そのものであり、その基本的な姿勢は、人間を直視し、その生きている現実の苦の生存の問題に対決していく中で、真実の自己の実現を達成するという点にあったのではないかと思えます。

1. 一切は苦である

若い日のゴータマ・ブツダは、物質的に大変にめぐまれた環境にありながらも、早く母を亡くしたせいでしょうか、物思いに耽る傾向があり、人間の老・病・死について深刻に受けとめ、苦しみ悩んでいました。苦とは何か？これが人間ゴータマ・ブツダの生まれながらの大きな課題でありました。

そこでその苦とは何か、その苦の原因は何か、それを克服する方法は何かを教えているのが、我々に残されている沢山の仏典の内容であります。

①苦とは何か

「苦」の考察は、ゴータマ・ブツダの思索の出発点であったと思われれます。代表的な苦は四苦、すなわち生苦・老苦・病苦・死苦であります。それに、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦の四苦を加えて八苦であります。

ではこれらの苦の本質とは何でしょうか。残念ながら、原始仏教の聖典のなかには、この問いに対する答えは見出されないようです。そこで諸研究者の研究を参照してみると、苦の語義については、「各々の欲望期待にそわないこと」(宇井伯寿博士『印度哲学研究』Ⅱ、三〇〇、二二二頁参照)、「自己の欲するままにならぬこと」「自己の希望に副わぬこと」「思いどおりにならぬこと」(中村元博士『原始仏教の思想』上、春秋社、九八頁)と説明されています。すなわち、必ずしも生理的な苦痛、あるいは心理的な苦悩のみを意味しているのではないのです。楽(快感)であろうと、苦(不快感)であろうと、その何れでもない非苦非楽であろうとも、内的にも外的

にも、およそ感受されたものは「苦」である(『スッタニパータ』Ⅲ、七二八―九)といわれているように、初期の仏教では、「苦」とは、何かに囚われていて、自由ではない境地にあることを意味しているといえましょう(中村元「思想」上、九八頁、同「原始仏教——その思想と生活——」NHK ブックス、六六頁)。

② 苦の原因は欲望

人間の苦は、人間のもつ根源的な衝動的な欲望——渴愛、生存欲——にもとづいて起こると考えられております。この種の欲望がなければ、生きていくことそれ自体が不可能となるといつてよいと思います。この種の欲望は、逆に、その欲望が充足されれば、すなわち飲みたいものが飲めたり、手に入れたいものが手に入れば、消滅する性質のものです。しかしその欲望が満たされないとき、それを「苦」と感ずるのです。

③ さとり(涅槃)は欲望の原因である無明の消滅

欲望は苦の原因ですが、さらに欲望を引き起こす根本原因が求められ、それは、無明、すなわち人間が生まれながらにしてもっている根源的な無知であるとされました。ヒンドゥー教でも、無明をもつとも重要な貧欲・煩惱などの原因と考えられております。キリスト教における原罪に相当するとも言われています。ゴータマ・ブッダは「スッタニパータ」(Ⅲ)において、1「どんな苦しみが生ずるのでも、すべて無明によつて起こるのである」2「しかしながら無明が残りなく離れ消滅するならば、苦しみの生ずることがない」という二つの観察法を、修行僧たちに示しています。

すなわち、苦の根本原因は無明であり、苦をなくすには、その無明を残りなく滅すればよい、と説いたのでした。その苦しみのない、安穩の境地がブツダの求めた悟りであり、解脱であり、涅槃に他なりません。

④万物は燃えている

ゴータマ・ブツダが、サルナート(鹿野苑)で初めて法を説き、悟りを開いたブツダガヤーに戻って来られたとき、そこには結髪をした三人のバラモン兄弟が住んでおりました。かれらは火に仕える儀礼をおこなう有力な火の行者でしたが、結局、三人とも、その千人の弟子たちとともに、ゴータマ・ブツダの弟子となってしまいました。この大事件の後、ゴータマ・ブツダは、新しい千人の弟子たちと一緒に、ガヤーシーサ山(象頭山)に行き、滞在したときに、山上で、かれらに次のような「燃える火の教え」を説かれたのでした。

「修行僧たちよ、すべてのものは燃えている。修行僧たちよ、すべてのものは燃えているといふのはどういうことであるか。修行僧たちよ、眼は燃えている。眼の対象であるもろもろのかたちのあるものは燃えている。眼の認識活動は燃えている。眼と形あるものと認識活動との接触は燃えている。眼との接触によって生ずる感受せられたものは、楽しいものであっても、苦しいものであっても、それもまた燃えている。何によって燃えているのであるか。食欲の火によって、瞋恚の火によって、愚痴の火によって燃えている、生・老・死という憂い・悲しみ・苦しみ・嘆き・悩みによって燃えている、と私は説く。(二)

ゴータマ・ブッダは、人間そのものが、あたかもむさぼり求める食欲の火によって、怒り憎しみおよび瞋恚の火によって、愚かで、ものの道理を解さない愚痴(無明)の火によって燃えており、生・老・死という愛い・悲しみ・苦しみ・嘆き・悩みという火によって燃えている、と説いています。現代の資本主義社会は、TVや新聞やインターネットなど、あらゆる方法を使って、これでもか、これでもか、と人間の欲望を駆り立てています。

これまで火に仕えてきた弟子たちに、山上で教えるゴータマ・ブッダの姿は、なにかイエスが山に登って腰をおろし、近くに寄ってきた弟子たちに、有名な「心の貧しい人々は、幸いである」ではじまる「山上の垂訓」(「マタイによる福音書」五〇七章)を行った姿と重なるものを感じさせます。

2. 真実の自己の探求

ゴータマ・ブッダが、サールナートで初めて法を説かれてから、ブッダガヤーに向かって遊行する途中のことでした。ゴータマ・ブッダは道からそれて、ある密林の方へと深くわけ入って、とある樹木の下で坐っておられました。そのとき三十人ほどの青年たちが、夫人同伴でやって来て、一緒に遊び楽しんでいました。しかしその中の一人の青年には妻がなかったため、かれはやむをえず遊女を連れて遊びにきていました。ところがかれらが遊び楽しんでいるうちに、この遊女が持ち物を盗って逃げてしまいました。

そこでその青年は、他の青年たちと一緒に、遊女を探しながら、密林を徘徊しているうちに、

ゴータマ・ブツダが、樹下に坐っておられるのを見つけ、ゴータマ・ブツダに近づいて、女を見かけなかったかどうか、を尋ねました。かれらが事の次第を話したところ、ゴータマ・ブツダは、青年たちに向かつて、

「青年たちよ、……きみたちが女を探し求めるのと、あるいは自己を探し求めるのと、きみたちにとってどちらが勝れているのか」

「自己を求めることの方が、われわれにとつて勝れていると思います」

「それでは坐りなさい。きみたちのために教えを説いてあげよう」

「尊い方よ、かしこまりました」〔律蔵・マハーヴァツガ〕一四・三

と云つて、四つの聖なる真理（四正諦）などについて教えられたと伝えられています。しかしこの探し求めるべき自己は、欲望の燃えさかる我執に満ちた自己ではない。このことは、ゴータマ・ブツダの遺言といつてもよい言葉が残されています。

「この世で自己を鳥とし、自己をたよりとして、他人をたよりとせず、法を鳥とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとしてはならない。」（二六）〔大バリニツパーナ経〕

二二

が伝えられております。これは漢訳の仏典で「自帰依、法帰依」、「自灯明、法灯明」と言われる言葉と同じで、他人を依り所とせず、自己を依り所とすること、仏陀が説いた真理(法)を依り所とすること、を意味しています。

その自己はあくまでもゴータマ・ブッダが生前に明らかにされた宇宙の真理、理法と合致する自己であり、我執、無明にまみれた自己ではないことは明らかです。これがゴータマ・ブッダの人生の最後の言葉であるだけに、ゴータマ・ブッダの真意をここに見ることが出来るのではないかと思います。ゴータマ・ブッダの目指したものは、真実の自己、本来の自己を実現することであったのではないのでしょうか。

ゴータマ・ブッダは、修行僧たちに、多くの人々の幸福のために、法を良くたもち、実践し、実修し、盛んにするように、と繰り返し説かれたのでした。その後で、今から三ヶ月過ぎたのちに、自分は入滅することを予告されたのでした。その後で、さらに次のように言われました。――

「わが齢は熟した。

わが余命はいくばくもない。

汝らを捨てて、わたしは行くであろう。

わたしは自己に帰依することをなすとげた。

汝ら修行僧たちは、怠ることなく、よく気をつけて、

よく戒めをたもて。……〔大パリニツバーナ経〕三・五一)

これは、まさしくゴータマ・ブッダの別れの言葉であり、遺言であります。ここで注目を引くのは、自分は解脱を達成したとはいわれず、「わたしは自己に帰依することをなしたとげた」といつておられることです。ゴータマ・ブッダの晩年の最大の関心事が「自己にたよれ、法にたよれ」ということだったのでしょうか。二千五百年の時空を超えて、ゴータマ・ブッダは今も「自己に帰依する」、換言すれば真実の自己の実現を説いておられるように思います。

3. 慈悲の実践

あるとき、ゴータマ・ブッダが、当時の強国コーサラ国の首都サーヴァッテイー市のジェータ林（祇園精舎）に滞在しておられました。そのとき、コーサラ国のパセーナテイ王が、王妃マツリカー夫人と一緒に、宮殿の屋上で並んで、美しい月を眺めておりました。

月を愛でながら、王様が、夫人に「あなたには、ご自分よりもっと愛しい人がおりますか？」と尋ねました。王は、おそらく夫人から、「それは王様です！」という甘い答えを期待していたのでしょう。ところが、意外にも夫人は、「大王様、私には自分よりも愛しい人はおりません。」と答え、さらに「大王様にとっては、ご自分よりもっと愛しい方がおられますか？」と尋ねたのです。そこで王様も、「私にとっても、この自分よりも愛しい人はおりません。」と答えざるを得ませんでした。

王は、おそらくこの夫人の正直な返答に、人間は生きている限りは、本能的にまず自分のことを考える、という事実にはハッと気づいたのでした。そこで王は、宮殿から降りて、ゴータマ・ブ

ツダのところへ赴きました。そしてその話をゴータマ・ブツダに報告いたしました。そこでゴータマ・ブツダは、その一部始終を聞いて、次のような詩を唱えられました。

「大王が、心でどの方向に探し求めてみても、自分よりもさらに愛しいものをどこにも見出さなかつた。それと同じように、他の人々にとつても、それぞれの自己が愛しいのである。それ故に、自己を愛する人は、他人を害してはならない」と(『サンユッタ・ニカーヤ』Ⅲ・一・八)。

自己中心的で反省がなく、我執の強い人は、他人の立場に立つて考えることができません。他人の立場に立つて考えること、このことが実に大切なことであることを、この挿話は端的に教えてくれます。他人の立場に立つことから、仏教のいう「慈悲」、すなわち慈しみの心が生まれて参ります。

我執の強い人ほど、自分は、他人から独立した、あるいは隔絶した存在であり、他人から何の好意も恩も受けたことはない、と考えがちであります。しかし他人から隔絶した自分というものには存在しません。この事實は、自分の存在を考えてみればすぐ分かることです。

まず、直接的には、自分の両親がいなければ、今日の自分は存在しません。その両親にもそれぞれに両親があり、限りなく遡ることが出来ましょう。それだけではありません。自分の毎日食べている食べ物は、ほとんどすべて漁師さんや、お百姓さんや、その他の人々が額に汗して捕っ

たり、作ったりしたものです。自分の着ている洋服や下着など、これもほとんどすべて他の人々の努力の結晶です。自分のもっている知識も、ほとんどすべて、両親やら、先生やら、友人やら、他人の書いた書物やらから得たものです。このように考えて参りますと、無数に多くの人々の力が、われわれに影響を及ぼして、その力のお陰で、個々人の今日があるのです。太陽や、水や、自然の力も忘れることはできません。われわれは気づかないけれども生かされているのです。

先ほど他人の立場に立つことから、仏教のいう「慈悲」、すなわち慈しみの心が生まれると申しました。慈悲の慈は、サンスクリット語の「友人」を意味するヘミトラから派生したヘマイトリーで、これは「友情」を意味することばです。すなわち真の友人の間の真実の友情、真実の親愛の念を他の人々にあまねく及ぼすことを意味しています。これに対して「悲」のサンスクリット語は、ヘカルナーで、これは「哀憐、同情、優しさ、哀れみ、情け」を意味する言葉です。慈は、人々に利益と安楽をもたらそうと望むことであり、悲は人々から不利益と苦しみを除こうと望むことであるとも解釈されています。ある場合には、慈は父の愛、悲は母の愛にたとえられることもあります。しかし本質的には慈も悲も同じですから、二つの語を合わせて一つの觀念として表現され、それを実践することが強調され、さまざまに説かれるようになりました。慈悲は人間のみなならず、生きとし生けるものに及びます。この慈悲は、男女間にみられる愛とは異なります。男女間の愛は、ややもすれば裏切られることがあります。裏切られると憎しみに変わりがちです。しかし慈悲は、愛憎を超えたものです。

4. 最期の遺言

ゴータマ・ブツダは、最後の直弟子スバツダに教えを説き、いよいよ臨終を迎えられます。

「さあ、修行僧たちよ。お前たちに告げよう、「もろもろの事象は過ぎ去るものである。忘るることなく修行を完成しなさい」と。(七)

という「修行をつづけて来た者の最後の言葉」を残して、安らかに息をひきとられたと伝えられています。野球のイチロウの前人未踏の大記録、九年連続の二〇〇本安打も人一倍の努力があったからではないでしょうか。

人間の最後の言葉は、その人の一生を凝縮したような重い意味をもつ場合が多いように思います。このゴータマ・ブツダの最後の言葉は、後に残していく修行僧たちに対する訓戒であると同時に、ゴータマ・ブツダの生きざまが間接的に述べられているのではないのでしょうか。

VI むすび

そろそろ時間が迫って参りました。締めくくりたいと思います。先程、コーサラ国のパセーナデイ王と王妃マツリカー夫人のお話を致しました。人間は生きている限り、自我意識、自己中心的な考え方から自由になることはできたいものがありますが、慈悲の実践のためには、我執を

捨てること、すなわち無我となることが必須であります。無我説をその根本思想の一つとしていうことは仏教徒自身のみならず、インドの他の哲学諸学派も認めていることです。

小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)は、その著作「ニルヴァーナ」(涅槃)、一八九七)の中で、この「無我説」を取り上げて、仏教の無我説が、道徳的に価値高い重要な教義であるにもかかわらず、西洋の思想家たちは、正しい評価を与えていないことを指摘しております。そして八雲は、仏教思想が、当時の科学的成果と一致しているとし、永遠不滅で、他と隔絶された西洋的な自我、西洋に根強く見られる、仏教の無我説と相反する諸々の信仰を取り上げて、それらが如何に多くの人類の不幸を引き起こしているかを、次のように批判しております。

(仏教の無我説と) 正反対な信仰——つまり、常住なものがあるという迷妄、言い換えれば、性格、身分、階級、信条の差別は、ある不変の法則によって定められているという迷妄、——不変・不死の有情の靈魂は、神の気紛れによって、永遠の幸福か、永遠の煉獄へ行くように運命づけられているという迷妄——これらの迷妄から、如何に多くの人類の不幸が起こっていることであろうか。

疑うまでもなく、神というものは、怨みをもつたら最後、どこどこまでも怨みつづけるという觀念、——靈魂は、一定不変の状態に宿命づけられている永遠・不変の実体であるという觀念、——罪は償うことができず、罰は決して終わらないという觀念——こういう觀念は、社会がかつての未開な発展段階にあった時代には価値がない訳ではなかった。しかしこれからす

ます進歩する未来の人類進化の中では、そんな観念は、お払い箱になってしまうにきまつている。」

と、断言しております。そして八雲はさらに続けてつぎのように申します。

そんな西洋的な観念を一日も早く衰滅させるような明るい結果を招くために、西洋思想が東洋思想と接触することが望まれる。そんな西洋的な観念を発達させた感情さえも、われわれのなかに尾を引いている間は、本当の意味の寛容の精神なぞ生まれるわけがないし、真の人類同胞の観念も、世界愛の目覚めも、起(こ)り(こ)は(こ)はないのである。(“Nirvana,” *Cleanings in Buddha-Fields*, Rutland & Tokyo : Charles E. Tuttle Co., 1971, p. 228)

このように八雲は、西洋的な永遠不滅の自我を認めず、性格・階級・民族の差別を認めない仏教のもつ今日的・未来的意義を強調しております。

近年、安易に「自我の確立」などといって、西洋的な自我を、猿真似のように強調する人々がありますが、西洋的な自我の行き着くところは、今日の世界のあちこちで起きているような様々な紛争であり、究極的には人類の滅亡を招くこととなります。八雲が、すでに、百十二年も前に、仏教の無我説の今日的・未来的意義を見出し、西洋思想が東洋思想と接触することを望んでいたことは、驚嘆すべきことでもあります。世界がグローバル化し、今日のように多くの民族が緊

密に接し会い、共生していく必要があるような時代になって参りますと、ゴータマ・ブツダはますます大きな声で無我説を、そして慈悲の精神を強調されるのではないかと思います。

最後に、財団法人東方研究会と、それによって運営されている東方学院の理念を申し上げて終わりにしたいと思います。

東方学院の創立者である中村元先生は、インド哲学・仏教学のみならず西洋の思想・哲学にも精通した世界的な巨匠でありました。先生が、その八十六年の人生を学問一筋に打ち込み、東西の思想の蘊奥を窮め尽くして最後に到達されたもの、それは慈悲でありました。その先生の慈悲の実践の一つの結果が、先生の後半生を傾注し、私財を投じて創立し、昭和四十五年十一月、文部省(現在の文部科学省)より財団法人設立の認可を受けた財団法人東方研究会でありました。本研究所は、「東洋思想に関する研究調査を行い、その研究成果の普及を図り、もって学術・文化の発展に寄与すること」を目的としております。

しかし先生の隠された意図は、そればかりではなく、経済的に恵まれない、若くかつ有能なインド哲学・仏教学の研究者に研究継続の機会と場を与えて育成することにあります。幸いにして大学や研究所で定職を得て財団法人東方研究会から巣立っていった研究者の数は八十二名にも達しております。

中村先生は、さらにその研究の成果を社会に還元するために、この財団法人東方研究会を母体にして、昭和四八年に東方学院を設立されました。東方学院は、東京のお茶の水の神田明神の鳥居のところに東京本校(東京都千代田区外神田二―一七―二)を持つておます。その他に関西地

区には、十教室十八講座、名古屋には三教室八講座、開講しております。

東方学院は「個人指導の場の共同体」を目指し、入学する条件は、何もありません。学歴も職業も性別も年齢も問いません。ただ一つの条件があるとすれば、本当に勉強したい、という意欲の持ち主であることです。そのために東方学院では、入学される方を、受講生とは申しません。

研究会員と申しております。(詳細は、TEL〇三―三二五―四〇八一、FAX〇三―三二五―四〇八二にお問い合わせ下さい)

中村先生は、ご夫人と共に、東京の多磨墓地にある先生のお墓の横に石碑を建て、それに「ブツダのことば」と題する以下のような文言を刻み、後世に残されました。

「慈しきみ」

一切の生きとし生けるものは、

幸福であれ、安穩であれ、安樂であれ。

一切の生きとし生けるものは幸せであれ。

何びとも他人を欺いてはならない。

たといどこにあっても

他人を軽んじてはならない。

互いに他人に苦痛を与える

ことを望んではならない。

この慈しみの心づかいを

しっかりとたもて。

この文言は、仏典(「スッタニパータ」)から先生が意識され、それをご夫人が書かれたもので、しかも一九九五年の先生の誕生日に発注され、一九九七年のご夫人の誕生日に完成したものです。これは財団法人東方研究会の研究員に示された指針であると同時に、怨念と我執が渦巻き、テロの恐怖におののく二十一世紀の人類へのメッセージでもあります。私どもは、このブツダのことは私どものホームページ(URL||<http://www.joho.or.jp>)のトップに掲げ、先生の高邁な理想の継承と発展に日々努力しているところであります。

これをもちまして講演を終わりたいと思います。ご静聴有り難うございました。